

KANSAI*OSAKA

文化力

No.117

2013/AUTUMN・秋



特集 関西・大阪文化力会議

基調講演

エズラ・ヴォーゲル氏 (ハーバード大学名誉教授)

鼎談 エズラ・ヴォーゲル氏に聞く

国分良成氏 (防衛大学校長)

萩尾千里氏 (大阪国際フォーラム会長代行)

パネルディスカッション

桂 文枝氏 (落語家)

近藤誠一氏 (前文化庁長官)

園田茂人氏 (東京大学大学院情報学環教授)

村田晃嗣氏 (同志社大学長)

企業メセナ最前線

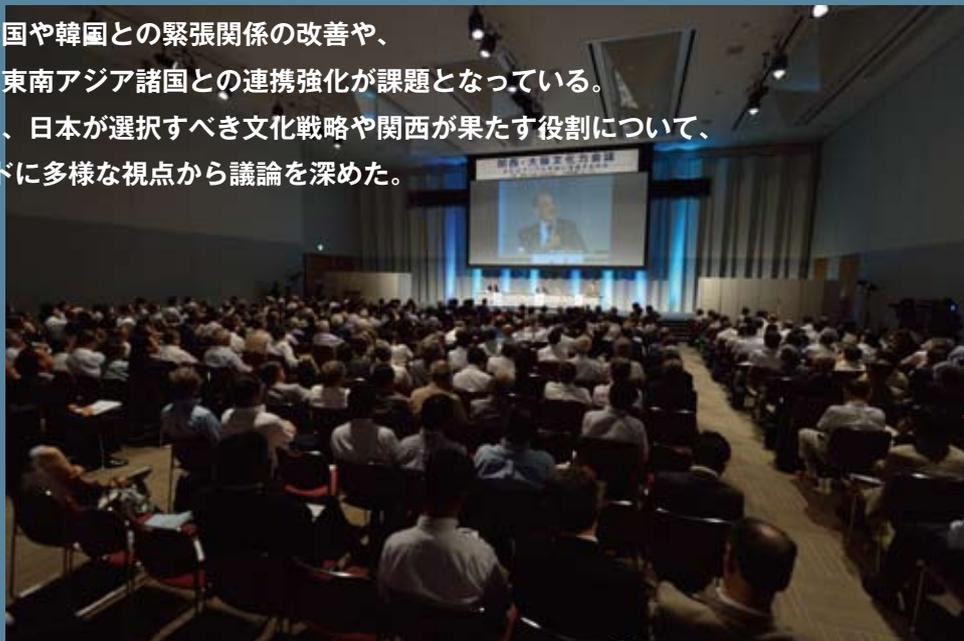
大和ハウス工業株式会社社長兼CEO 樋口武男氏

特集

文化はアジアの平和に貢献するのか

関西・大阪文化力会議

日本にとって今、中国や韓国との緊張関係の改善や、海洋国家として広く東南アジア諸国との連携強化が課題となっている。こうした課題に対し、日本が選択すべき文化戦略や関西が果たす役割について、「文化」をキーワードに多様な視点から議論を深めた。



主催：関西・大阪21世紀協会、大阪国際フォーラム

主催者開会挨拶

世界の人々から敬愛される 文化立国・文化立都の実現に向けて



公益財団法人 関西・大阪 21 世紀協会
会長 熊谷信昭

文化は、人々の暮らしや幸せ、あるいは豊かさなどに直結する根源的なものであると同時に、民族や国家の繁栄、さらには国際平和や世界の歴史を動かす力さえ持っているといっても過言ではありません。そのことは歴史の事実が示しています。実際、これまでに世界、人類に大きな影響を及ぼした国や地域や民族は、すべて、それぞれの時代に、経済力や軍事力だけではなく、世界に冠たる学術や文学、芸術、芸能などの文化の力を持っていました。

国や地域が繁栄し、かつ世界の人々から敬愛されるような名誉ある国家、世界の人々が憧れるような魅力あふれる地域となるためには、「文化立国」、「文化立都」を目指さなければなりません。

関西・大阪21世紀協会は、文化の振興と交流を通じて世界の国々と相互理解を深めていくとともに、関西・大阪の活性化、ひいてはアジア地域の平和と繁栄に貢献してまいりたいと存じております。

本日は、「文化はアジアの平和に貢献するのか」というテーマのもとに、文化の持つ力や文化の果たす役割、具体的な取り組みを推進するための方策、などについて幅広い視点からご議論いただき、私どもが「文化立国」、「文化立都」を目指して進むべき歩みの新しい指針が示されることを願っています。

日中関係の緊張を解くカギは 鄧小平の描いた発展戦略にある

エズラ・ヴォーゲル氏 (ハーバード大学名誉教授)

現代中国の父

私は、アメリカ国民にもっと中国のことを理解してほしいという思いから、鄧小平やその時代について研究してきました。

1904年に四川省で生まれた鄧小平は、10～20代でフランスやソビエト(モスクワ中山大学)に留学し、若い頃から世界情勢について理解を深めていました。毛沢東への忠誠心も厚く、1949年に国民党との内戦を指揮して勝利したり、文化大革命(1966～1977年)が起るまでの10年間は、共産党総書記として政務を統括しました。毛沢東は理念を掲げて階級闘争を進めようとする人でしたが、鄧小平は現実的かつ実務的な思考で政治を動かすタイプです。

鄧小平は生涯に3度失脚しましたが、3度とも政治の表舞台に復帰しています。1974年には中国の指導者として初めて国連総会で演説を行い、毛沢東が亡くなった翌年の1977年からは、改革開放政策に従って工業、農業、防衛、科学技術の「4つの近代化」を強力に推進しました。なかでも科学技術の向上を重視し、鄧小平はノーベル物理学賞を受賞した中国系アメリカ人らを度々北京に招いて話を聞いています。教育改革にも力を注ぎ、大学入試制度を導入してエリート教育の基盤を築きました。こうした発展戦略を推進したことで、鄧小平は「現代中国の父」と称されています。

鄧小平外交で変わったこと

1978年10月、鄧小平は中国の指導者として初めて日本を訪れ、昭和天皇と会談しました。天皇陛下が第二次世界大戦について「不幸な出来事」と言及されると、鄧小平は「これからは両国の平和と友好のために貢献したい」と応じました。中国の宝山製鉄所のモデルとなった新日鉄君津製鉄所を視察した際には、その記念に中国語で「日中友好の協力への道はますます広がる。我々は共に努力しよう」と揮毫しています。また、日中国交正常化(1972年)に大きな役割を果たした田中角栄元首相の私邸を訪問。当時、田中角栄はロッキード事件で自宅拘禁中だったため周囲が難色を示しましたが、鄧小平は「水を飲むとき、井戸を掘った人のことを思い出すべき」という中国の諺を出して実現しました。大阪では松下電器産業の工場を視察しています。この訪日を機に、日本の小説や映画なども中国に紹介され、中国人の日本への思いが良くなりました。

また、1978年12月に米中国交正常化が表明されると、翌79年1月、鄧小平はアメリカを訪問し、行く先々で大歓迎を受けました。テキサスのロデオ会場では、馬に乗った女性



からカウボーイ・ハットが差し出され、彼はそれを笑顔で被って見せました。このニュースは全米に伝わり、米国民に「鄧小平は共産主義者だが、我々と同じユーモア精神を持った人間であり、彼とは友好的に交渉ができる」という気持ちが芽生えました。これは中国でも話題になり、中国国民は鄧小平がアメリカで楽しそうにしているのを見て、今まで「アメリカ帝国主義」と呼び嫌悪していましたが、これからはアメリカの文化や生活様式に学んでもいいと思いはじめたのです。

戦後の日本を理解すべき

現在、中国は尖閣諸島問題で強硬な態度に出ています。かつて鄧小平は、この問題を棚上げし、日中の友好関係の構築を優先すべきだと考えていました。しかし、その思いに反して、近年の日中関係は悪化の一途にあります。私はその原因の一つに、中国における愛国教育があると思っています。1989年の天安門事件の後、中国の指導者は、若者たちが東ヨーロッパやソビエトと同じような民主化革命を起こすのではないかと恐れました。そこで国民の愛国心を高揚させることで、共産党一党独裁体制への批判をかわそうとしたのです。そのもっとも効果的な方法が「反日」でした。戦争で日本に苦しめられたことばかり教え、「日本叩き」を煽ったのです。もう一つは、GDPで日本を追い抜くほど中国が経済力を高めてきたこと。これに慢心する一部の指導者や学者などが、外交政策はもっと強硬であるべきだと言い始めました。

私は、鄧小平が生きていたら、こうした高慢な政策を絶対に許さないだろうと思います。私は2013年4月、中国各地で鄧小平について講演し、日中友好を重視した鄧小平の思いや、日本が第二次世界大戦後に軍国主義から平和主義へと変わったことなどを理解すべきだと指摘しました。今こそ、鄧小平が求めた「お互いの利益になる友好関係」が必要だと思います。

エズラ・ヴォーゲル氏に聞く



エズラ・ヴォーゲル氏（ハーバード大学名誉教授）

国分良成氏（防衛大学校長）

萩尾千里氏（大阪国際フォーラム会長代行）

中国は今後どのような道を選び、日米は中国といかに向き合うべきか

中国が辿るべき道

萩尾 中国は文化大革命以降、鄧小平による改革開放政策によって急成長を遂げ、彼の仕事がいかに偉大であったかを実感させました。しかし現在は、その遺産が極めて大きな負担となっているのも事実です。そこで、中国は今後どのような道を選ぶのか、日本は中国に対してどう向き合っていくべきか、アジア太平洋地域の安定にむけ、日米は今後何をすべきか。この三つをテーマとし、まずは中国が今後辿るべき道について伺いたいと思います。

国分 大変難しい問題提起ですが、私は今、中国に必要なものは“謙虚なリアリズム”と“大胆さ”だと思います。今や中国は、国際社会なしでは成り立たないという現実があるにも関わらず、周辺諸国に対して中華思想的な行動を起こしてしまう傾向が非常に強い。もっと謙虚なリアリズムを持たなければ、中国の今後の発展は難しいでしょう。また、中国における社会主義市場経済の矛盾が限界にきていると思います。共産党独裁の市場経済ゆえに既得権益層が生まれ、最近では、重慶市元トップの薄熙来の事件や中央政治局前常務委員の周永康の疑惑など、さまざまな問題が出てきています。これらの人々が讃えているのは、表向きは毛沢東であり、社会主義の理念です。しかし実際には、自らの資産を公開しないような、国有企業を中心とした経済体制を壊したくないと思っている。いわば私的利益との関係だけを考えているようにみえます。中国の今の社会主義市場経済は、次に進むべき大胆な道が必要だといえるでしょう。私はもし今、鄧小平が生きていたら、どのように考えるのだろうかと思います。

ヴォーゲル 国分さんが言われたように、今の中国は体制を守り安定させたいと強く思っています。しかし、私が心配するのは、もし中国の経済成長が低迷した場合、国民の生活水準が保てるのかということです。今でも1億人以上の人々の生活は安定しておらず、医療制度も十分に機

能していません。中国はあまりにも変革が多いため、行政が安定しないのです。中国では今、毛沢東の考えが流行っています。なぜなら、毛沢東時代も腐敗問題はあったものの、今ほどひどくはなく、貧しいながらも国民に一体感があったと思っているからです。しかし、毛沢東思想で中国がもう一度大躍進するとか、文化大革命を起こすとかといえば、それはとんでもない話です。毛沢東時代が懐かしくても、現実には中国が歩むべき道は鄧小平が唱導した道だと思います。そのためにも中国はもっと世界に門戸を開放すべきです。その道しかないと思います。

萩尾 中国がGDP世界第二位という成長を遂げ、世界の中でその存在が大きくなっていく中で、世界と中国の関係はどうなるのでしょうか。

国分 いうまでもなく、今後、中国が風邪をひき、肺炎にでもかかろうものなら、世界経済が巨大な打撃を受ける可能性は極めて高い。しかし、どう見ても今の中国の経済成長は限界に達しはじめていると思います。中国が今やるべきことは、ヴォーゲル先生がおっしゃったように、鄧小平時代の精神に戻り、改革開放政策を徹底するしかありません。海外企業だけから多くの税金を取らず、税制を改正し、市場の透明性を徹底すること。こういうことができるか否かという重要なポイントにきていると思います。

中国とどう向き合うか

萩尾 中国は、靖国参拝や尖閣諸島の領有権をめぐる日本への反発を強めていますが、これについて我々はどのように対応すべきだとお考えでしょうか。

国分 中国問題に対しては冷静に対応してほしいですね。感情的になったら問題がこじれますから。とはいえ、どうしても認められないのは、中国には「井戸を掘った人の恩を忘れない」という諺があるにもかかわらず、反日デモの時に、鄧小平に請われ日中友好に尽力したパナソニックさんを筆



エズラ・ヴォーゲル氏



国分良成氏



萩尾千里氏



頭に、多くの日本企業が標的にされたことです。中国は、そうした日本企業に対して詫びるどころか、日本企業が日中友好や中国の経済発展に寄与したことすら言いたがらない。それは、中国の政治状況がものすごくセンシティブで、権力闘争と対日関係が絡んでいるからではないかと思えます。

ヴォーゲル 日本が中国に対してすべきことは三つあると思います。一つ目は、一度譲歩すれば次から次へとつけ込まれるので、日本は常に中国に対して強気な態度を取ることです。尖閣諸島問題がその例でしょう。二つ目は、靖国神社への参拝など、あえて挑発的な態度をとらないようにすること。そして三つ目は、日本は第二次世界大戦などの歴史を振り返り、自分たちが犯した過ちについてきちんと謝罪するとともに、日本が戦後、どれほど世界の平和貢献に対して尽力してきたかを主張することだと思います。

アジア太平洋地域の安定に向けて

萩尾 三つ目のテーマであるアジア太平洋地域の安定に向け、日本は今後何をなすべきだとお考えですか。

国分 日本はこれまで世界各国と友好関係を築いてきており、その一つに日米同盟があります。日本は日米同盟を中心として、中国、そして韓国とのパイプづくりをしていくべきだと思います。

萩尾 安全保障面でもアメリカの役割は非常に重要です。これについて日本やアジアは、中国とどう向き合うべきでしょうか。

ヴォーゲル 私が一番心配しているのは軍事力競争の過熱です。中国が軍備を拡大すれば、アメリカや日本を刺激して、情勢がさらに不安定になります。中国はなんとか経済成長を遂げたところで、以前よりも国内の混乱が増え、

軍備を増強する余裕があるとは思えません。にもかかわらず、なぜ中国は軍備を拡大するのか。それは、米中間、日中間に不信感が存在するからです。その不信感をなくすためには話し合いが重要です。米ソが対立した冷戦時代は、武器制限をはじめ、さまざまな話し合いが行われていました。話し合うことで互いを理解し合う。それが新しい時代の根本になると思います。

萩尾 鄧小平時代の中国と日本は政財界ともに交流が盛んで、会えば必ず日中の友好のために乾杯をしました。不信感など存在しなかったのですが、その後はそうした交流が少なくなってきたと感じます。ヴォーゲル先生がおっしゃるように、お互いの不信感を払拭するためにも頻繁に交流すべきだと思います。本日は貴重なご意見をありがとうございました。

プロフィール

エズラ・ヴォーゲル氏

1930年生まれ。50年オハイオ・ウェスリアン大学卒業。アメリカ陸軍勤務を経て61年ハーバード大学博士研究員として中国の歴史研究に従事。67年同大学教授(社会学)、93~95年CIA国家情報会議(CIAの分析部門)東アジア担当国家情報官。2000年ハーバード大学を退官し、鄧小平による中国の改革を研究。著書『中国の実験-改革下の広東』『ジャパン・アズ・ナンバーワン-アメリカへの教訓』など多数。11年『現代中国の父 鄧小平』(邦訳は13年9月・日本経済新聞出版社)刊行。

海洋国家日本の将来と関西



パネリスト

桂 文枝氏 (落語家)

近藤誠一氏 (前文化庁長官)

園田茂人氏 (東京大学大学院情報学環教授)

村田晃嗣氏 (同志社大学長)

コーディネーター

国分良成氏 (防衛大学校長)

「多様性」と「寛容」の精神が関西文化の発信力を高める

今、アジアで起きていること

国分 本日は、アジア太平洋地域が今どう変わりつつあるか、そのなかで日本が発揮できる力や課題は何か、さらに大阪を中心に関西が日本の将来のためにどのような役割を担っていくのかなどについて話を進めていきたいと思います、

園田 アジア太平洋地域、とりわけ東南アジアでは今、中間層の人々が経済的に豊かになって消費が拡大し、インターネットを利用してさまざまな国の物事や情報を生活に取り入れています。商品だけでなく、民主主義という政治制度から文化、さらには大衆演劇にいたるまで幅広く受け入れ、発信しています。そこでは自分たちにとって極めて有用で使い勝手のよいものを選び取っているようです。例えば香港では日本の大衆文化が大人気ですが、日本の型にとらわれず、自分たちが面白いと思ったエッセンスだけを取り入れ楽しんでいる。そういう文化のキャッチボールが、海を越え、国境を越えて盛んに行われるようになってきました。

村田 政治学の分野では、1965年に京都大学の高坂正堯先生が「海洋国家日本の構想」という論文を発表しています。65年といえば東京オリンピックの1年後で、5年後には大阪万博が開催され、日本が活気に満ちあふれていた時期です。2020年の東京オリンピック開催が決定しましたが、一度目の1964年の頃とは国内外の社会的・経済的状況が大きく異なっています。日本では少子高齢化が深刻化し、国際情勢では米ソ冷戦が終結する一方、米中の新たな関係が進展しています。また、日本はアメリカと中国という二つの大国に挟まれ、太平洋、日本海、そして東シナ海も視野に入れた海洋国家として、米中関係を悪化させない努力をしつつ、国内の活力をどう取り戻していくのかという難しい課題に直面しています。しかし、依然としてアジアの中では日本が最も進んだ先進国であることは確かです。これからも、日本が歩

んできた道を他のアジアの国々が追体験していくことでしょう。そこで日本は、これまでの成功体験だけでなく、失敗体験もアジアと共有し、それを克服できるメカニズムをつくっていくことが重要になると思います。

心から心へ伝わる文化の力

国分 近藤さんは文化庁長官として、三保の松原を含む富士山の世界文化遺産登録に尽力されました。

近藤 富士山の世界文化遺産登録を成し遂げるにあたって、文化の力というものとは国境を越えて心から心へ伝わるものだと改めて実感しました。私たちがアピールしたのは、日本人は富士山から素晴らしい美意識を与えられ文化を醸成させていったことです。葛飾北斎、歌川広重に代表される浮世絵や信仰。人間も自然の一部であり、自然の懐の中で一体となって生きていくという知恵や、目に見えない価値。そして「間」や「余白」の美意識などを世界に訴えました。こうしてアジアの方々からは大きな賛同を、欧米の方々からは近代合理主義のなかで忘れがちであった、人間が本来持っている自然への敬意を喚起してくれたというメッセージをいただきました。そういう意味でも、私たちは日本の文化に自信と誇りを持つべきだと強く思い至りました。

桂 落語は約400年の歴史があると言われ、現在の落語は、約120年前、坐摩神社(大阪市中央区)境内に桂文治が小屋がけの寄席をつくったことに始まります。以来、落語は時代の息吹を取り入れ、受け入れられるようさまざまに変化してきました。だからこそ今も生き残っているのだと思います。以前、アメリカ公演で地元記者から「落語が日本の伝統芸能であることが非常に不思議だ」と言われたことがありました。つまり「笑い」は伝統芸ではなく、チャップリンやジャック・レモンのような個人芸ではないかと。しかし私は、何百年



桂 文枝氏



近藤 誠一氏



園田 茂人氏



村田 晃嗣氏



国分 良成氏

という落語の伝統を受け継ぐとともに、時代に応じた面白さを追求していくことが、世界に誇れる日本の素晴らしい「笑い」のセンスだと思います。

良きリーダー、良きフォロワー

国分 これからの日本、アジアを担っていく若い世代の動向についてはどうでしょうか。

村田 最近はグローバル人材の育成がよく提唱されています。同志社大学の創立者・新島襄は、「人材」ではなく、「人物」を育成すると言っています。「人材」というのは字のごとく役に立つ人です。しかし「人物」というのもっと内面的に深いものを持っている人でしょう。リーダーシップ論になると、とかく松下幸之助翁など偉い人の話ばかりになりがちですが、リーダーシップというのはリーダーとフォロワー(従う人・支える人)の関係の中で成立するものです。つまり立派なフォロワーがいなければ、立派なリーダーは生まれません。ただし、一人の人間が常にリーダーである必要はない。職場ではリーダーで家庭ではフォロワー、職場ではフォロワーで自治体活動ではリーダーの役割を担える。一人の人間の中にそれぞれの側面がある、つまり多面性のあることを理解して、人物、人材を育てていかなければならないと感じています。

園田 2008年に日本を含めアジアの大学生を対象に行った調査によると、日本の学生は海外留学で研鑽を積むことに概ね関心を示していますが、それをどう活かすかとなると途端に国内での就職の話になります。それだけアジアの中で日本が安定しているということですが、中国やタイ、ベトナムの学生たちは、とにかく2～3年は外国で学び、それをキャリアにして世界で働きたいという意識が高い。そういうメンタリティーをアジアの新興国の学生たちと対比してみれば、日本の学生の脆弱な面が見えてきます。

近藤 EUと東アジアの大学生を比べると、海外に留学し単位を所得して帰国する比率は10対1というデータがあります。また、東アジア圏内においては、留学生のほとんどが日本と中国に集中し、日本や中国から東アジア諸国への留学者は極端に少ない。EUにはエラスムス計画(European Region Action Scheme for the Mobility of University Students)という、大学生の交流を目的とした事業があります。高等教育機関における他国間協力、言語をはじめ各国・各地域の伝統や精神を尊重し、違いを認識させつつ相互理解を促進しようとするものです。残念ながら東アジアでは、そうした国家間の交流システムはありません。東アジアにエラスムス計画をつくるのが私の夢でもあります。

桂 私は世界各国で落語公演を行っています。なにしろ日本の話芸ですから、字幕や同時通訳などを駆使しても、その魅力を伝えるのはなかなか難しい。そこで、昨年行った桂文枝襲名記念パリ公演では、言葉の遊びで笑わせるネタではなく人情噺にしたんですね。すると現地の方々から「素晴らしいかった!」「アートだった!」と。言葉はわからなくても心は伝わるものだ実感しました。若者たちのお話が出ましたが、私の弟子に「三輝」と書いて「サンシャイン」と読むカナダ人がいます。彼は今、米国、カナダ(約30公演)で、私の「創作落語」をまさに本場の英語を使って演じるツアーを行っています。私は落語を世界に広めるには、この方法が一番ではないかと思っています。

イノベーションを起こせる関西に

国分 最後に、関西が今後どのような役割を果たしていけるのかについてお伺いします。

村田 関西を語るとき、「伝統」は欠かせないキーワードだと思います。また、大阪、京都、神戸と個性豊かな三つの都市

があり、地域全体に多様性があるということも大きな魅力です。アメリカのある都市経済学者が、どんな大都市でもイノベーション(革新)が起これなければ衰退すると言っています。イノベーションを起こすには、才能のある人が集まることが必要です。ではどうすれば集まるか。それは多様なものを受け入れる寛容さだと言っています。寛容な街には、才能豊かな人が集まってくるというのです。関西人の気質の一つにアンチ東京がありますが、アンチだけでは先はないと思います。私たちは、関西以外の地域に対して寛容でしょうか。さまざまな文化を受け入れる寛容と多様性を育てていくことが、関西がイノベティブであり続けるために非常に重要なことだと、私は思います。

園田 イノベーションというと偉大な天才が書齋にこもって考えつくというイメージがありますが、実はそうではなく、日常的な工夫や面白いことに目をつける、そういう些細な行為から起こってくるんですね。例えば日本の代表的な料理に寿司と天ぷらがありますが、これを同時に味わうために「寿司天ぷら」を作ってみようという人が現れる。成功するか否かに関わらず、そういうところから文化の強みを見つけていく。そして多くの場合、そういうチャレンジングな人は本道から少しだけ外れたところにいる。まさにサンシャインさんのような人です。それをプロデュースする人がまた、少し外にいる。外にいる人を上手く取り込み、中にいる人を外に送り出していく。多様性のある人がそういう感性を持っていれば、いろいろな文化

の発信・受信が促進されるのではないかと思います。

近藤 私は、関西には、日本が陥っている「東京病」、つまり官主導縦割り、文化の軽視、短期成果主義などから国を救う力があると思っています。具体的には、関西に根付いている伝統文化を重んじ、異なる新しいことをどんどん取り入れていくということです。伝統芸能を見ている、活気のあるジャンルは常に新しいものを咀嚼しながら取り入れています。そういう力が関西にはあります。東京病にかからず、ぜひ踏ん張っていただきたい。

桂 村田先生が言われたように、大阪が発展してきたのはまさに寛容の精神だと思います。大阪の寛容さは、「しゃれ言葉」に代表されるようなユーモア精神です。見るだけで何も買わない客を「ひやかし」だとストレートに言わず、「夏のはまぐり」としゃれてみる。「身腐って貝腐らん(見くさって買いくさらん)」と言うわけです。また、資金不足の人は「赤児の行水」。たらいで泣いてる(お金が足りないで泣いている)。他にもたくさんあります。こうしたユーモア精神があれば、大阪は大丈夫だと思います。最後に2020年のオリンピックですが、東京ばかりになるのは心配なので、私はここでもう一度、大阪への万博招致を提案させていただきます。

国分 「多様性」「寛容」「イノベーション」「ユーモア精神」と、重要なキーワードが導き出されました。関西のより一層の文化力発信に期待します。ありがとうございました。

関西・大阪文化力会議を終えて

地球規模の視座を持って アジアの国々と心の通い合う交流を

今回は、エズラ・ヴォーゲル名誉教授から、現代中国の父といわれる鄧小平の生涯と思想を通じて、現代中国の源流と今後中国が進むべき道について示唆に富むお話を伺いました。また、パネルディスカッションでは、大切な隣人である中国、韓国はもとより、広くアジアの人たちと文化を通じて理解と交流をどのようにして深めていくのかという課題に対し、「多様性」「寛容」といった重要なキーワードをいただきました。

ここで私は、当協会の設立に関わられました梅棹忠夫先生が、かねがねおっしゃっていたことを思い出しました。それは、「地球の北緯20～50度、東経120～150度に位置している日本にとって、その横軸(緯度)上にある国々、つまり日本列島の西側にある大陸国家とうまく付き合いながら、さらには縦軸(経度)上の国々とも連携を強化していくべきだ」



公益財団法人 関西・大阪 21 世紀協会
理事長 堀井良殷

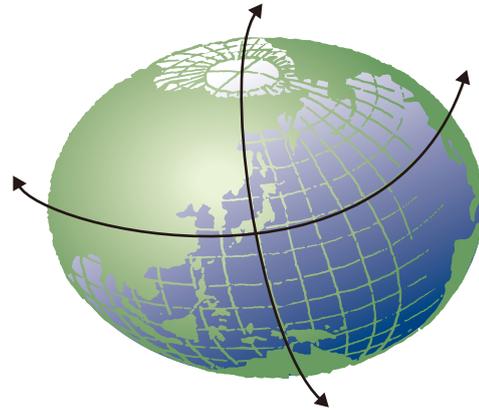
というものです。

とくに関西は、縦軸上にある東アジアの国々と深く付き合い合ってきた歴史があります。17世紀初頭の大航海時代には、ご存知黄金の日々を築いた堺の港から、御朱印船や末吉船などが頻繁に東南アジアの国々と交易や文化交流を展開しました。本日は、こうした歴史を未来に活かしていくべきだというご意見もいただき、あらためて、関西は横軸・縦軸ともに心の通い合う交流によってアジアの発展と平和に貢献していかなければならないという思いを強くしました。

今回の関西・大阪文化力会議「中之島宣言」は、そうした広い視野に立った思いを込めて、本日の議論を総括したものであります。朗読していただくのは、文化と芸能の神である「摩多羅神(またらしん)」に扮する和泉流狂言師・小笠原

匡さんです。

なお、今回はフィナーレとして、イタリアの仮面喜劇団「コンメディア・デッラルテ」の俳優であるアンジェロ・クロッティさんたちにもご協力をいただき、ガムラン音楽に合わせて、光の神と闇の神の争いを摩多羅神が調和するという舞をご覧ください。小笠原さんが演じる摩多羅神は、まさに日本のキーワードである「寛容」の象徴でもあります。



関西・大阪文化力会議

中文島宣言

亜細亜太平洋 多様な価値観が渦巻く地域なり
 海の国ニッポンは 南北軸に重きをおき 地域安定と発展のため
 経済交流 文化交流の誘い役を果たすこと しかと心得るべし

文化は 創造力と共感の源なり

日本最初の万国博開催地 浪速より

人類のさらなる進歩と調和を推進すること 関西の務めなり

ニッポンの魅力は これ 経済力 と 文化力 なり

関西に 唯一無二の技術あり

また 関西に様々な文化あり

技術を磨き 高めること

文化を育み 醸成すること 経世済民とは此のことなり

関西復活百年の計は、先を見る力のある者
 才ある者を育てることと心得るべし

此如く 浪速の地より事始め

萬民ともに力を尽くすべし

萬民ともに力を尽くすべし

平成二十五年九月十日
 関西・大阪文化力会議



小笠原 匡さん
 公益財団法人 能楽協会会員 大阪支部所属
 日本能楽会会員 重要無形文化財総合指定保持者

フィナーレは賑やかな神々の舞

光の神と闇の神の争いを、小笠原 匡さん演じる摩多羅神が、寛容の精神をもって平和へと導くストーリー。日本(狂言)、イタリア(即興仮面劇)、インドネシア(ガムラン演奏)の伝統芸能によるコラボレーションが披露された。



大和ハウス工業株式会社 代表取締役会長兼CEO 樋口武男氏に聞く

1963(昭和38)年、大和ハウス工業は大阪駅西口に陸橋を寄贈し、これが日本初の鋼管併用による歩道橋となった。創業者の石橋信夫氏が、当時、交通戦争と呼ばれるほど急増する交通事故を憂いてのこと。「何をやったら儲かるかではなく、何が世の中の役に立てるか、喜んでもらえるかを考えて事業を興すべき」が信条の石橋氏は、一代で同社を1兆円企業へと成長させる一方、社会貢献活動も積極的に行ってきた。そうした石橋イズムを継承する樋口武男会長に、同社におけるメセナ・社会貢献活動への思いを伺った。

創業者の精神を受け継ぎ 社会の公器として社会貢献活動を推進

国内外でさまざまな社会貢献活動

創業者の石橋相談役は、いつも「会社は社会の公器である」と言っていました。それは、当社および当社グループ全従業員とその家族の生活を支えることであり、同時に大和ハウス工業として、人々に喜ばれる事業を通じて社会に貢献していくことです。私は、そうした創業者の思いを受け継いでいくことが使命だと思っており、会社としてできる限りの社会貢献活動を行っています。

例えば最近では、カンボジア支援プロジェクト(2008年～)として、現地で井戸や小・中学校の建設を支援しました。また、

去年は、当社が保有していた茨城県高萩市の山林82万坪を、子どもの自然体験や環境教育の一助にもらうべくボーイスカウトの野営地として無償譲渡したり、来年には、東京大学(本郷キャンパス)にユビキタス研究の拠点施設「東京大学大学院情報学環 学術研究棟」を建設して寄贈します。

「モーレッツ企業」のオーナーが託した思い

石橋相談役は、亡くなるまでの4年間、能登・羽咋の山荘で療養生活を送っていました。その間、私は毎月ご報告に行き、



会社や事業のことなどさまざまな話をしました。あるとき石橋相談役は、「いま社会が、国が、何を求めているか。遊びから芸術・文化までよく考えないと、大和ハウスは潰れてしまう」と話され、私は、「モーレツ企業」と言われた大和ハウス工業の創業者が、「芸術・文化」にまで言及されたことに、強く心が打たれました。

当社は、芸術活動の支援も積極的に行っています。そのひとつに、大阪4大オーケストラのひとつである大阪交響楽団(旧:大阪シンフォニカー交響楽団)への支援があります。同楽団の理事長だった井植敏三洋電機元会長に頼まれて、2006年から後任に就いているのですが、これには特別な思いがあります。つまり、私を事業家として育ててくれた石橋信夫は、かつて若手経営者仲間だった佐治敬三さん(元サントリー会長)や山田稔さん(元ダイキン工業会長)らとともに、世に言う「井植学校」の門下でした。私は井植敏さんから大阪交響楽団の支援を頼まれたとき、井植歳男さん(三洋電機創業者)から石橋信夫へ頼まれているのだと感じ、快くお引き受けしたわけです。

気負いなく芸術・文化に接する

2006年、本社で大阪交響楽団による初のロビーコンサートを開きました。私は、その記念にタクトを振ったのですが、とても緊張しました。実を言うと、私は小学生の頃から音楽が大の苦手科目でした。10年ほど前の同窓会でカラオケマイクを握ったら、当時の担任の先生が「樋口君、あんた歌えるの」と言われたほど。そんな私でも、普段から芸術・文化に馴染むようになってきたことで、趣向が変わってきたように思います。「大エルミタージュ美術館展(2006年)」を初めて特別協賛したとき、ある人から「音楽や絵画などは、頭ではなく心で感じれば十分。“いいな”と思えば、理解しているということ」と言われ、それ以来、自分なりに芸術・文化を楽しんでいます。

「大エルミタージュ美術館展」は、当時、同美術館の所蔵品が初めて海を渡ったとして、マスコミの注目を集めました。記者会見で「どれだけの資金をサポートしたのか」と質問を受けたのですが、絵画の門外漢である私に質問が回ってくるとは思っていませんでしたので準備をしておらず、感じたまま「芸術や文化の価値はお金で計れるものではないのではないですか」と答えました。これには主催者の氏家齊一郎さん(日本テレビ会長・当時)が、とても感激し

て下さいました。

芸術・文化関係では、大エルミタージュ美術館展やウィーン・フィルハーモニー管弦楽団の日本公演など、継続的に行っているものも多くあります。2007年には、当社の総合技術研究所(奈良市)内に「石橋信夫記念館」を建て創業者を顕彰していますが、以来毎年、各界の有識者による「石橋信夫記念館文化フォーラム」を開催し、抽選で選ばれた一般の方々を東西の本社ビルにお招きして好評をいただいています。

サステナブルな企業であるために

近年は環境問題に対するCSR活動も積極的に行っています。昨年は、新大阪駅中央口に草花に囲まれたウェルカムガーデン「大阪花屏風(大和リース株式会社)」をつくったり、今年6月には安藤忠雄さんと協力し、大阪マルビルの1階から6階までを緑で覆う「都市の大樹プロジェクト」を始動しました。大阪は都心に緑が少ないといわれますが、こうした活動や想いが広く市民に伝播してほしいと思います。中之島の護岸壁を緑化すれば、大阪のイメージがもっと良くなるでしょうね。

当社は創業者の夢である「創業100周年で10兆円の企業群達成」に向けてチャレンジしています。現在、当社グループ全体の年商は2兆円を超えていますが、これは石橋信夫がその基礎を築いてくれたおかげです。私はその恩を忘れず、「会社は社会の公器」「社会の役に立ち、喜んでもらえる事業」という創業者の精神を継承し、いかにしてその夢を実現するかを日々考えています。それを実践してこそ、当社が100年、200年と存在価値を持ち続けるサステナブル(持続可能)な企業になるのだと思っています。

樋口武男氏

1938年兵庫県出身。1961年関西学院大学法学部卒業、1963年大和ハウス工業入社、1984年同社取締役、2001年同社代表取締役社長を経て、2004年より現職。大阪商工会議所副会頭(2005~2013年)、住宅生産団体連合会会長(2009年~)。著書『熱湯経営「大組織病」に勝つ(文春新書)』『先の先を読み複眼経営者「石橋信夫」という生き方(文春新書)』『私の履歴書 凡事を極める(日本経済新聞出版社)』

大和ハウス工業株式会社

本社：大阪市北区梅田 3-3-5 / 東京本社：千代田区飯田橋 3-13-1
創業 1955 年。建築、都市開発、環境エネルギー、農業など数々の事業を展開。資本金 1616 億円(2013 年 8 月)、売上高(単体) 1 兆 2388 億円(2013 年 3 月期)、従業員数 13,623 名(2013 年 4 月 1 日現在)。



石橋信夫氏(1921~2003年)



大和駅前交通安全陸橋(1963年/大阪駅西口)



大エルミタージュ美術館展(2012年/東京・国立新美術館)(名古屋市美術館、京都市美術館でも開催)



大阪マルビル緑化プロジェクト(2013年6月/大阪市北区)



カンボジア(コンブルグ村)での井戸建設プロジェクト(2008年)



大阪シンフォニカー交響楽団(現・大阪交響楽団)ロビーコンサートで指揮を執る樋口会長(2006年)

写真提供：大和ハウス工業株式会社

夏

大川に揺れる3万個の「いのり星」 平成の星愛信仰をロマンチックに演出

平成OSAKA天の川伝説2013

7月7日／大川・八軒家浜(天満橋)

主催：平成 OSAKA 天の川伝説推進委員会
(平成 OSAKA 天の川伝説実行委員会、
関西・大阪 21 世紀協会)

七夕の夜、人々の願いごとを託した光の球「いのり星[®]」を大川に一斉に放流し、天の川を地上で再現する市民参加イベント「平成OSAKA天の川伝説」が、今年も大川・八軒家浜で開催された。5回目を迎える今年は、約3万個の「いのり星」を放流。天満橋や八軒家浜棧橋付近で、約6万5千人が幻想的な光景に見入った。

このイベントが当地で開催されるのは、天満の地名が「天(星)満つる地」に由来することからきている。現在の大阪城あたりに難波宮があった時代、当地は日本の平安を願って星に祈りを捧げる地とされた。難波津の護り神である大阪天満宮の天神祭も古くは七夕の日に行われ、船渡御が行われる大川は「天満川」と呼ばれていた。平安京に遷都された後も、新しく即位された天皇は、難波津で行われる「八十島祭(やそしままつり)」に使者を遣わし、御衣に難波津の風を取り込むことで大海原の生命力を身につけたといわれている。このとき祀られた「生島(いくしま)神・足島(たるしま)神」によって、新天皇は国土統治の資格を得た。この祭祀は鎌倉時代に途絶えたが、「生島神・足島神」は、現在も生國魂神社(天王寺区)に祀られている。

こうした由緒を重んじて、今回の「平成OSAKA天の川伝説」では、大阪天満宮の岸本政夫禰宜と生國魂神社の中村文隆禰宜による神事で幕を開けた。御巫が白衣に川面の風を取り込む中、行事のつぎがない進行を祈り、大

阪天満宮の井戸から汲み上げた天満水で大川を清めた。続いて、天の川に鵲(カササギ)が翼を連ねて橋を架け、牽牛と織姫を会わせたと中国の七夕伝説に因んで、大川を天の川に見立てて八軒家浜棧橋で船上結婚式も行われ、鵲を模した風船が放たれた。そうして陽が西に傾きはじめて7時過ぎ、篠笛奏者の井上真実さんの素朴で美しい演奏が響くなか、大川に「いのり星」が次々放流された。

「平成OSAKA天の川伝説」は、大阪城を中心に音楽や伝統芸能などさまざまな行事が集約的に開催される「大阪城サマーフェスティバル(7月4日～9月15日)」のキックオフイベントとして位置づけられ、大阪の夏の風物詩となっている。今年も、「セタクルーズ(大阪水上バス、ルポンドシエル主催)」や、七夕ならではの婚活イベント「天満橋★コン」なども同時に開催。八軒家浜には多くのカップルが詰めかけ、大川に揺れる「いのり星」がロマンチックなムードを演出していた。



御巫が白衣に川面の風を取り込む



大阪天満宮の井戸水「天満水」で大川を清める



井上真実さん(作曲家・篠笛奏者)による篠笛演奏

大川に浮かぶ「いのり星[®]」(八軒家浜付近)





文楽若手会がグランプリ 創設50年を迎えた大阪文化祭賞

平成25年度 大阪文化祭賞贈呈式

9月1日／阪急百貨店うめだ本店「祝祭広場」

主催：大阪府、大阪市、関西・大阪21世紀協会



賞贈呈式を見る人々(祝祭広場)

5～6月の2か月にわたり開催された「大阪文化祭」。創設50年目を迎えた今年は、大阪府内各所で70件の参加公演が行われ、その中から19名の専門家の審査を経て大阪文化祭賞各賞が決定した。9月1日、阪急百貨店うめだ本店「祝祭広場」にて、賞贈呈式が公開された。

平成25年度の大阪文化祭賞グランプリは、第13回文楽若手会「絵本太功記(6月22～23日・国立文楽劇場)」の出演者一同に贈られた。主催者の関西・大阪21世紀協会の堀井良設理事長は、「グランプリを若手に贈ることについて議論はあったが、若手の成長を高く評価し激励することで審査員の意見が一致した」と語り、記念楯と関西・大阪21世紀協会より副賞賞金50万円を贈呈。文楽若手会を代表して挨拶に立った豊竹咲甫大夫氏(義太夫)は、「昨年は文楽界に対して多くの叱咤激励を頂戴し、一同目の色を変えていろんなことにチャレンジした。今後も、私たちが文楽界の将来を背負って立つ思いで頑張っていきたい」と緊張気味に喜びを語った。

大阪文化祭賞は、大阪の文化・芸術分野で際立った活躍をし、大阪文化祭において優れた公演を行った人や団体を顕彰する制度。昭和38年(1963年)に大阪府と大阪市が共同で創設し、毎年、「伝統芸能・邦舞・邦楽」「現代演劇・大衆芸能」「洋舞・洋楽」の3部門で賞選定が行われている。過去50年の受賞者には、五十嵐喜芳氏(オペラ)、茂山千作氏(狂言)、渡辺貞夫氏(ジャズ演奏)、ミヤコ蝶々氏(演劇)など、日本を代表するアーティストが名を連ねている。平成13年(2001年)からは大阪21世紀協会(現 関西・大阪21世紀協会)が事務局となり、府・市との3者で主催している。

協会は、大阪文化祭を芸術・文化分野における人材発掘や育成、交流事業として重視しており、受賞者の記念公演を開催するなどアピールの機会を増やすことで、大阪文化祭への関心や重みを高めようと努めている。これまで、

協会主催の「関西・大阪文化力会議(平成22、23年)」での記念公演や、一般社団法人クラブ関西の協力を得て、協会賛助会員などを対象にした「アート・アSEMBリー」の開催など、アーティストの支援を続けている。今回は、昨年のリニューアルオープンで注目を集める阪急百貨店うめだ本店「祝祭広場」を賞贈呈会場にし、2008年にグランプリを受賞した地主薫バレエ団による50周年特別記念公演も行うなど、同賞や受賞者を広く市民にアピールした。

他の受賞者は以下の通り。大阪文化祭賞：京山小圓嬢氏(一心寺門前浪曲寄席における「壺坂霊験記」の成果)、大阪交響楽団(定期演奏会における「ハンス・ロット作品」の演奏の成果)、同奨励賞：小林鈴純氏・谷 保範氏(新進と花形による舞踊・邦楽鑑賞会における尺八「アキ」の成果)、林家染弥氏(「染弥二十年目vol.2～師匠の十八番～」の成果)、入谷幸子氏(ピアノ・リサイタルの成果)、清原邦仁氏(関西歌劇団第95回定期公演「仮面舞踏会」リッカルド役の成果)。



文楽若手会による受賞者記念公演



地主薫バレエ団による50周年特別記念公演

OSAKA水上音楽パレード2013

4月27日／大川・八軒家浜、道頓堀川・戎橋、湊町周辺

関西フィルハーモニー管弦楽団・首席指揮者の藤岡幸夫氏を迎え、全国的にも高いレベルを誇る大阪の高校生他による吹奏楽やチアリーディングが披露された。四條畷学園高校、大阪市立扇町総合高校、東海大学付属仰星高校、箕面自由学

園高校、大阪スクールオブミュージック高等専修学校、大阪府警察音楽隊他が出演。澁刺とした演奏で、水都大阪の魅力をアピールした。



四條畷学園高等学校吹奏楽部(八軒家浜会場)



大阪市立扇町総合高校吹奏楽部(道頓堀にて)

交流サロン 21café

中村稔氏「橘街道プロジェクト」

5月27日／大阪キャッスルホテル

近畿経済産業局が取り組む「橘街道プロジェクト」を、同局総務企画部長(当時)の中村稔氏が紹介。地域資源を戦略的に活用するプラットフォーム(仕組み)をつくろうというもので、和菓子の祖と言われる田道間守(たじまもり)がみかんの原種である橘の実を大陸から持ち帰ったことに由来。関西各地での橘を使ったお菓子作りや町おこし、業種を越えたブランディング戦略についてお話を伺った。



中村稔氏



橘の実

安藤忠雄氏「大阪を元気にする」講演会

3月29日／大阪国際会議場



安藤忠雄氏
(写真提供：安藤忠雄事務所)

「桜の会・平成の通り抜け」など、官民による数々の大阪活性化プロジェクトを紹介。「大阪を誇りある街にするためには文化が必要」と、約4000人の参加者に訴えた。
【主催】大阪を元気にする会(関西経済連合会、大阪商工会議所、関西経済同友会、関西・大阪21世紀協会)

‘13食博覧会・大阪

4月26日～5月6日／インテックス大阪



「食のコンクール・和菓子部門」で関西・大阪21世紀協会理事長賞が贈られた梶谷英行氏(西村清月堂)の作品
(写真提供：食博覧会実行委員会)

4年に1度開催され、今年は8回目。世界各地の米料理を集めた「スミル・マルシェ食育館」や「日本(世界)の味覚館」など国内外の「食」が紹介され、約65万7000人の来場者で賑わった。

【主催】食博覧会実行委員会、大阪外食産業協会
【協力】大阪商工会議所、関西・大阪21世紀協会

南大阪・上町台地フォーラム

浪速高津宮を訪ねて

7月15日／高津神社

仁徳天皇を主祭神とし、上方落語や歌舞伎、文楽などにも登場する高津神社（大阪府中央区）を参拝。境内にある仁徳天皇ゆかりの高津宮（たかつのみや）を模した絵馬殿や、250年以上前から現存する神輿庫などを見学した。旭堂南青氏による講談「千両の富くじ」も口演され、参加者は浪速の人情物語に聴き入った。



小谷真功宮司が絵馬殿を案内



旭堂南青氏

観月祭

9月19日／住吉大社

仲秋日（旧暦8月15日）、反橋の上で和歌や俳句を詠み、舞楽や住吉踊りなどを奉納する住吉大社の観月祭。参加者は、住吉大社権禰宜の小出英詞氏より観月祭の説明を受けた後、反橋のたもとで風雅な伝統神事を見学した。



観月祭

伝統文化の保存・継承

御田植神事

6月14日／住吉大社

住吉大社（大阪府住吉区）に数ある神事のなかで、とくに盛大で華やかな「御田植神事（重要無形民俗文化財）」を見学。1800年前に起源をもつこの神事は、明治以降、大阪・新町花街の芸妓が植女となり、現在は上方文化芸能運営委員会（関西・大阪21世紀協会）などが伝統を継承している。



植女となる芸妓（右）が白粉や簾を施される「粉簾の儀」（神館）



「御田植え」の間、八乙女が中央舞台上で田舞を舞う

賛助会員講演会・交流会

中桐万里子氏・二宮尊徳の「実践的幸福論」

7月10日／国立国際美術館



中桐万里子氏

二宮金次郎（尊徳）の子孫である中桐万里子氏（関西学院大学講師、国際二宮尊徳思想学会常務理事）を迎え、一般には知られていない尊徳のエピソードや、地域興しの考え方（報徳思想）、人生観などを伺った。

ワークショップフェスティバル DOORS 7th

8月2～11日／大阪国際交流センター、大阪市立芸術創造館、旭区民センター、大阪市中央公会堂

7回目を迎えた今年は、全96講座中、インド（サリー着付、舞踊）、ブラジル（カポエイラ）、ドイツ（ボードゲーム）、タイ（楽器演奏）、アメリカ（ゴスペル）など、国際色豊かなワークショップを数多く展開。「教室のお問い合わせや感想もいただき、良い励みになりました」とは、「インド舞踊入門講座」講師の浜田さえこ氏（インド舞踊アトリエ「ナーチェナーチェ」主宰）。同講座の女性参加者（大阪市内勤務）は、「ワンコイン（1講座500円）でプロの指導を受けられるのが魅力」と息を弾ませた。

【主催】インターナショナル ワークショップ フェスティバル実行委員会（関西・大阪21世紀協会、LLPアートサポート、大阪市）



「踊るインド!～インド舞踊入門講座～（浜田さえこ講師）」
（写真提供:IWF実行委員会）

新進アーティストたちの展覧会&マーケット アートストリーム2013

入場無料

11月15日(金)→17日(日)

大丸心齋橋店北館14階「イベントホール」

大阪をはじめ関西を中心に活躍する新進アーティスト60組による絵画やイラストレーション、オブジェ、彫刻、クラフトなど、さまざまなオリジナル作品を展示販売します。お気軽にお立ち寄りください。最終日には、出展アーティストの中からアワード受賞者を審査選考し、表彰式を行います。

◆大賞/奨励賞(審査委員)

- 絹谷幸二氏 (画家・大阪芸術大学教授)
- 蓑 豊氏 (兵庫県立美術館館長)
- 中崎宣弘氏 (空間構想デザイナー)
- 田崎友紀子氏 (スーパーステーション取締役副社長)

◆企業・ギャラリー賞

アートチャイルドケア賞、インターグループ賞、FM802賞、大阪水上バス賞、がんこフードサービス賞、the three konohana賞、大丸賞、ターレンスジャパン賞、堂島リバーフォーラム賞、凸版印刷賞、ハートス賞、ホルベイン賞、関西・大阪21世紀協会賞



前年度「大賞」受賞の
小松原智史さんも出展!

- 主催: アートストリーム実行委員会(関西・大阪21世紀協会、大阪芸術大学、大阪府、大阪市)
- 後援: 大阪商工会議所、関西経済同友会
- 協賛: 大阪芸術大学、サントリーホールディングス、ダイキン工業、三菱地所
- 特別協賛: 大丸心齋橋店

問合せ: 実行委員会事務局(関西・大阪21世紀協会内)
☎06-6942-2004 FAX06-6942-5945

インテリジェントアレー 専門セミナー

関西・大阪21世紀協会提供講座
テーマ 関西文化~釣って、食べる~



ベーリング海の巨大オヒョウに舌鼓を打つ開高健氏(左)と、「開高隊」の専属料理人として、世界各地での釣行を共にした谷口博之氏(右)
(撮影) 1982年初夏 オーパ、オーパ!!
(写真提供: 谷口特任教授)

第1回 1月15日(水)



「関西釣り文化概論」
講師: 佐々木洋三氏
シマノインストラクター
関西・大阪21世紀協会 専務理事

第2回 2月19日(水)



「釣り人と関西の食文化」
講師: 谷口博之氏
辻調理師専門学校
日本料理特任教授

第3回 3月26日(水)



「日本人と釣り文化」
講師: 夢枕 獭氏
作家
(写真提供: 夢枕事務所)

場所: キャンパスポート大阪(大阪駅前第2ビル4階)

受講料: 全回受講5,000円(各回毎受講の場合は1回2,000円) 各日とも定員70名(先着順)

申込方法: HPからお申込ください。 **インテリジェントアレー専門セミナー** **検索**

問合せ: 関西社会人大学院連合事務局 ☎06-6210-3620 (E-mail) cpoosaka@kansai-auae.jp

関西・大阪21世紀協会賛助会員へ
入会のお願い

関西・大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会費(何口からでも結構です)

- 法人会員一口につき年会費10万円
- 個人会員一口につき年会費1万円

特典

1. 協会が発行する刊行物の配布
2. 協会が主催する各種セミナーなどへの案内
3. 賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

お問合せ (公財)関西・大阪21世紀協会 広報・総務チーム TEL.06-6942-2001 FAX.06-6942-5945